

## オシフィエンチム(Oświęcim)

1985年の夏は、最近の異常気象とは異なりいつも通りの夏で、夏休みを利用して出かけた欧州では、時にセーターも使う涼しい気候に恵まれた。その旅の後半は、旧ソ連を除き初めての東欧行きだった。当時「共産圏」と呼んでいた地域だ。目指したのはポーランドのオシフィエンチム、ドイツ語名アウシュビッツ(Auschwitz)で知られる戦時中の強制収容所の跡だった。

### ウィーンからポーランドへ

東欧への窓口と呼ばれるオーストリアの首都ウィーン。夏の終わりの夕刻、その「南駅」から、ワルシャワ行きの寝台列車「ショパン(Frederic Chopin)」に乗った。列車の手前2両は、途中ポーランドに入って間もないカトヴィツェで切り離され、古都クラコフに向かう。途中チェコの国境の入りと出、さらにポーランド入国となり、パスポート・コントロールのためろくに眠れぬまま、列車はまだ夜が明けやらぬクラコフの中央駅に滑り込んだ。

列車では日本人の青年と同室になった。彼もアウシュビッツに行くという。ポーランド語が少しわかる彼が、眠たい目をこすりながら、駅前のバス停の表示を見やる。二人で早朝6時台のバスに乗り、オシフィエンチムに向かった。所要1時間半。バスは途中黄金色に輝く麦畑の中を通り、終点国鉄のオシフィエンチムの駅前に着いた。街はさびしいたたずまいだが、駅舎はそれに比べかなり立派で、鉄道の要衝らしい光景だった。

この街に戦時中、ナチス・ドイツは全ヨーロッパのユダヤ人を絶滅する目的で強制収容所を造った。選んだ理由は、辺り一帯が低湿地で人が住まぬ場所で周囲から隔絶された土地だったから。その一方、四方に鉄道が伸び、列車での移送(実際には貨車!)が容易だったからと言われている。

### アウシュビッツ第一収容所

駅から南に歩いて20分。アウシュビッツ第1収容所は、ソウア(Sola)川の流りに沿って3列に整然と区画された建物とその間の道とで構成され



当時のアウシュビッツ第一収容所 正門

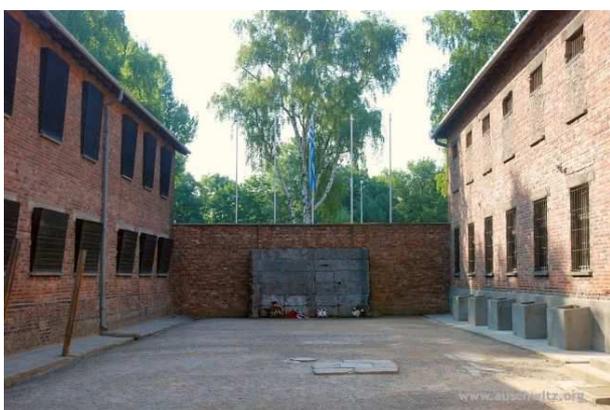
ていた。戦後に造られたインフォメーション・センターを通り中に入る所で、まずは「Arbeit Macht Frei」と書かれた入口があった。「働けば自由になれる」という文句は、ナチスがそこで行っていた犯罪＝「虐殺」を隠蔽するための手段だった。ここに収容された人々は一部を除いて自由の身に戻らず、故郷にも帰りつけなかった。

収容された人々が寝床をもっていた兵舎然とした建物は、どれもレンガ壁で作られた同形で3階の屋根裏が付き、予想外にしっかりと造りだった。それもそのはず、後で知ったことだが、同じ時期に作られた隣村のブレジンカ(独語名ビルケナウ又はアウシュビッツ第2)こそ「死の工場」と呼ばれたアウシュビッツを代表する収容所で、私たちがドキュメント・フィルムなどで目にするのは大抵、バラック建てのそちらの映像なのだ。

第1収容所は、このナチスの蛮行を記録するために所全体を展示・見学施設として利用している。見学順路に従ってそれらを見て行く。5号棟はナチスが犯した戦争犯罪をテーマとしていて、入るとすぐ缶入りの錠剤チクロンBの写真が目にとまる。収容所を管理するナチス親衛隊(SS)は、この施設に付属のガス室で一度に250人もの人々を抹殺した。それは一缶分のチクロンBを使い、空気に触れ気化させ、吸わせて殺戮したものだ。SSは戦時中、敵国のソ連兵、政治的反对者やユダヤ人を組織的に抹殺した。そしてヒトラーの意向に基づき全欧のユダヤ人数百万を絶滅するため、その能率的な殺し方を研究した。たどり着いた答えがガス室での大量抹殺だった。

6号棟は、収容者の生活をテーマとしていて、黒白縞の囚人服や収容者の身の回り品（旅行鞆・眼鏡・革靴そして男女とも剃髪にされた時の頭髪・抜かれた金歯や杖など）がうずたかく積み重ねられたコーナーがある。それは収容者の財産をすべて奪取するため集められたものだ。鞆に白墨で書かれた収容者の名がいまだに消えずに残っていた。7号棟には、収容者がすし詰めになって寝ていた三段ベッドが残されている。それは3階の屋根裏部屋にも、無造作に置かれていた。

### コルベ神父の死



第11ブロックの中庭 処刑場

10号棟と11号棟の奥はレンガ壁で繋がれており、それは「死の壁」と呼ばれている。時に見せしめのため、この壁を背にしてSSは収容者を銃殺した。いつも献花が絶えず、この時も赤いカーネーションがささげてあった。右側の11号棟には、外から半地下へと降りる階段がある。それは「死のブロック」と呼ばれたこの建物の入り口だった。この地下には収容者への拷問や見せしめのための処刑を行なう部屋が並んであった。人が一人、立ってしか入れぬ独房があった。そしてがっしりした扉の奥に、数人を閉じ込めた餓死室。暖房もない部屋で、全員が死ぬまで水も食事も与えずに苦しめたという。

1941年のある日、反ナチスの容疑で一人のポーランド人神父がここに収容された。彼は結核を患っていたが、それをうまく隠してガス室行きをまぬかれ、そのガス室で亡くなった人々の遺体を処理する仕事に従事していた。3ヶ月位たった頃、めったに成功しない脱走を試みて一人の収容者が

逃亡した。その晩中収容者全員が外での整列を強制され、揚句に10人の見せしめの処刑者が選ばれた。突然その一人ガイオニチェックさんが泣き出した。彼は家族の身を思いすすり泣いたのだ。

その時神父が進み出て、代わりに自分を犠牲にして、と申し出た。マクシミリアン＝コルベというこの人は、他の9人と共に餓死室に入れられ、仲間が死ぬ中2週間絶え抜いた。そして残った4人と共に、薬物注射で昇天したという。遠藤周作の短編『ワルシャワの日本人』には、このコルベ神父がその数年前、長崎大浦天主堂で宣教していたこと。敬虔なカトリック国ポーランドで未だに聖人に近い尊敬を受けていることを紹介している。

コルベ神父が絶命した11号棟から出て、再び外の光を見ると、道は収容所の端まで来ていて、その先には有刺鉄線が二重に張り巡らされていた。独語で“Halt!”（止まれの意味）と書かれた金属の立て札が今なお残っていた。当時、有刺鉄線には380Vの高圧電流が通っており、収容者の逃亡を防いでいた。それでもこの有刺鉄線へ飛び込む者は後をたたなかったと言う。収容者は連日の過酷な奴隷労働、見せしめの処刑や拷問などに、いつかは我が身と思わされた。それならばと、この有刺鉄線に身を委ねたのだ。それは「感電死」と言う、よりましな選択ができたからである。

### しばし、闇の中で

収容所の南西の端まで来たので、反対側にとって返し、二列目の建物を順繰りに見て歩く。この列には、収容者を送り出した各国が戦後それを記念して建物ごとに国別の展示館を造っている。

18号棟の2階に足を運んでいた時、突然、館内の電灯が消えた。出入り口の所にあるスイッチがタイマー仕掛けなので、設定された時間を過ぎてしまったと分かった。しかし暗闇に身を置いているのでその出入口が分からない。闇の中から、今にも無辜の犠牲者の怨念がよみがえるのではと、あらぬ想像をはたらかせることになる…。

床にさすほのかな光を頼りに足を向けると、突然切り取られたように光まばゆい四角の窓枠が見えてきた。近づいて見ると窓外の菩提樹の木の葉が



**収容所への最初の移送者** 主にポーランドの政治犯美しく輝き、風にそよいでいる。その明るい光景は、ここが人類史に稀有な「殺人工場」であったことが嘘であるかのように思わせた。スイッチを再びつけた。18号棟の展示は、ハンガリーとブルガリアからの犠牲者のために両国が担当していた。とりわけハンガリーの展示では移送されるユダヤ人の大きなパネル写真が目をついた。ドイツの敗戦が色濃くなった44年春、全欧州からユダヤ人を抹殺するというヒトラーの命令により、この国からもその強制移送が始まった。その数は40万人以上に達し、国別では最大となったと言う。

### エリ=ヴィーゼルのこと

囚われ人の中に、自伝的小説『夜・夜明け・昼』を書いたエリ=ヴィーゼルの姿もあった。彼は1928年に当時ハンガリー領だったトランシルヴァニアのシゲト(Sighet)という、今はルーマニア領になっている国境の町で生まれた。収容所に家族とともに移送された時は、16歳の敬けんなユダヤ教徒の一青年だった。

わずかに窓のある家畜用貨車に立錫の余地もないほど詰め込まれ、むせ返る中にいた彼は、移送中、飢えと渇きに苦しみ、用便もままならず、泣きじゃくる子どもやそれになすすべがない母親の苦しみを間近に見ながら、それでもとても楽観的で、行き着く先が絶滅収容所であることなど夢にも思わなかった。

四日目の午後、列車はゆっくりとビルケナウ(アウシュビッツ第2収容所)への引込み線へと入って行った。初めて知る名前だった。全員が貨車から降ろされての選別となった。それは遠くに見え

る火葬場で灰となるのか、それとも労働力として今しばらく生かされるのかを、親衛隊の医師メンゲレにより決められる運命の時だった。

赤ん坊や幼な子が明々とした炎の中にくべられて行く大きな穴の脇を通らされ、底知れぬ戦慄(せんりつ)を覚えながら、結局彼は父と共にバラック小屋に入ることを許された。しかし母やその他の家族は、この時を境に二度と会う事はなかった。アウシュビッツから生還できなかった。残された父と耐えた数ヶ月。彼は強制労働とわずかの食料というぎりぎりの生存状況の中で行き続けた。

年が明けて45年1月。戦況はドイツの敗北へと向かい、東からはソ連軍の砲火が聞こえてきた。収容者は西への再度の移送を迫られたが、父は病気を患い、彼は行くべきか否かを考えあぐねた。病人は撤退させないと告げられたからだ。父は殺される、と考えた子は父を連れて移送される方にかけて。その月の末、ソ連軍はここを解放した。その時多くの病人が残されていた。助かったのである。運命に翻弄された父は、移送先のドイツのブーヘンヴァルトで息絶えた。ヴィーゼル自身が自由の身になるには、4月まで待たねばならなかった…。

### 最後に、ガス室へ

18号棟を出るともう昼近くになっており、静かだった収容所跡の構内にも各国からの団体見学者の声が響いて来た。そのまま真っ直ぐに行くと反対側の鉄条網が見えて来て、小さな門をくぐると盛り土をした大きなマウンドがあった。ここがガス室と焼却炉のある一画だと案内図にはあったのだが、入り口が分からない。見学者の歩く方へと進むと右手にマウンドの盛り土が切れている所があり、そこから真っ直ぐに中央へと向かう緩やかな下り坂の通路があった。

赤錆びた鉄の頑丈な扉の奥に部屋は広がっており、奥の部屋に入るとそのがらんどろはむき出しのコンクリート壁に覆われて天井には金属製のシャワー・ノズルが幾つか下がっていた。そうここが、収容者を迎え入れ死に至らせる部屋だった。当時、収容者はシャワーを浴びられると聞いて半

信半疑、更衣室にすべてを置いてこの部屋に入って来た。いや本当にたまにだが、これから起こることに収容者が気がついて扉の所でパニックが起こることもあったと言う。頑丈なコンクリートの扉が閉められると、天井から出て来たのはお湯ではなく例の毒ガスだった。



ガス室の内部

それから 30 分。時が立つと反対側の扉が開き、これも収容者の一団からなる作業員が一体一体ずつ死者の遺体を運び出した。この時、収容者の遺留品から財産になりそうな物一切切をばき取り、その遺体からは金歯などを抜き去ったと言う。

隣の部屋は、火葬場で見かける焼却炉そのもので一度に三体が焼けるよう釜戸を備えていた。炭化して黒くなったその中を恐る恐るのぞく。そこには言葉には言い表せない絶望があった。唯一の救いは、置かれていたカーネーションの花だけだった……。

そのまま反対側から外に出た。頭上には銃を構えた監視役がいたという塔が立っていた。そして振り返るとマウンドの上には絞首刑の台と吊るすための構造物が残してあった。これは囚人のための物ではなく、アウシュビッツに最初に着任した S S の司令官ドルフ＝ヘスが、その戦争犯罪を裁かれ処刑された場所なのである。1947 年 4 月 16 日のことであった。

### クラコフからベルリンへの道中で

見学順路は丁度ここで終わっていた。入り口に戻ってその博物館に併設されている食堂で豆入りスープとパンだけの乏しい食事をとった。その日

はバスでクラコフに戻り、午後はアウシュビッツで見てきたことは忘れて、ハンザ同盟以来と言うこの美しい古都を見学した。その晩も国営旅行社オルビスで手続きをしてもらいクラコフのホテルに泊まった。

翌日、ポーランド南部を西へと横断し当時東ドイツ領だったザクセン地方の古都ドレスデンへと一日かけて向かう国際列車に乗った。向かい合い四人がけの座席には私以外に子供を一人連れたポーランド人夫婦が乗っていた。いかにもスラブ系の素朴さを感じさせるシャイな夫婦だった。途中ブロスラフ（戦前のドイツ領ブレスラウ）の街で大勢の東独へ帰るドイツ人観光客が乗ってきた。彼らはこの国で外国人であるにもかかわらずやたらと元気で、このポーランド人夫婦が空けてやった席に座った青年などとても快活だった。

夫婦の夫の方は、子どもを膝に乗せてそれからおも数時間、国境の手前の駅で降りるまで辛抱していた。ドイツ人青年はそんな配慮を気に留めるでもなく振舞っていた。外見以上にその性格が際立って違っているように見えた。これが民族というものののだろうか。そしてこの差異による現実を認めない所から人間は偏見を持ったり憎しみあつて来たりした。それがさらに戦争を生み、アウシュビッツに示されたようなあまりの惨禍(さんか)と過誤を引き起こしたのだ。そんなことを考えさせるポーランド行きだった。

国境を越えると東ドイツ入国のため一たん列車から降ろされた。ところがドレスデンでの宿泊予約を国営旅行社が閉店でできないという理由で入国を拒否され、東ベルリン行きの列車に乗せられた。その晩ベルリンのフリードリッヒ・シュトラセ駅で列車を乗り換えた私は、結局そのまま西ベルリンに出てツォー駅近くのホテルに宿をとることになった。夜の外灯が暗く街のあかりも乏しかった東ヨーロッパから戻った私の目には、西ベルリンの繁華街は目を幻惑(げんわく)させるほど眩しい光を放っていた。今はもう過ぎ去った「冷戦時代」のエピソードである。